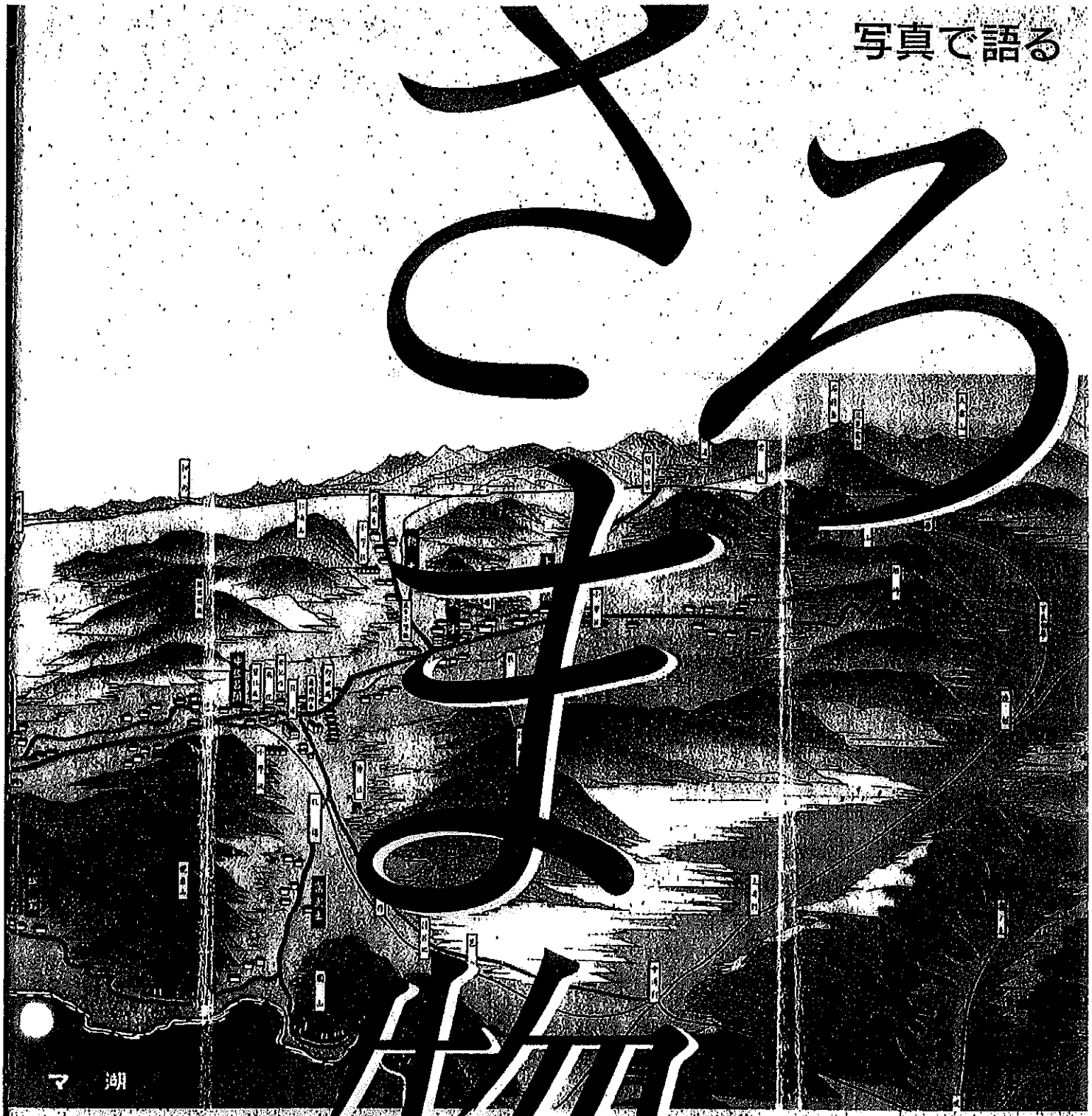
写真で語る

さろま物語

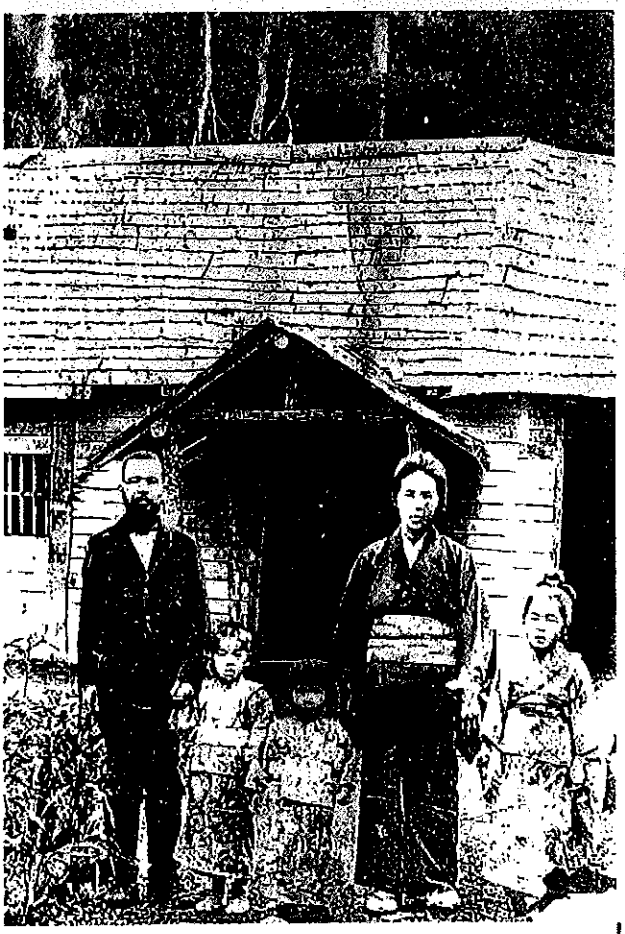


足尾鉱毒事件と、栃木団体苦難の移住。

佐呂間開拓の歴史の中で、特異な移民団として特記すべきは、明治４４年４月栃木部落に移住してきた足尾銅山鉱毒罹災者の集団移民であろう。

足尾銅山は江戸初期慶長１５年（１６１０）治部、内蔵２名の農民によって発見され、幕府直轄の銅山として栄えたが、幕末には廃鉱寸前となり、明治政府は民間に払下げを決め、同九年古河市兵衛が買取り近代方式で再建した。

時代は、我が国の近代化と軍備拡充の国家的金属需要の背景の中で、遂に国産銅の五割以上を産出する日本一の銅山となったのである。然し、その採鉱、精練の廃液は利根川支流の渡良瀬川に放流されており、洪水の度に鉱毒の悪水が氾濫、流域八ケ村の田畑に著しい被害を及ぼし、農民の生活は極度に困窮していた。明治４３年関東地方を襲った大洪水は、遂に渡良瀬の農民を致命的惨状に追込み、この地に於ける営農と生活を不能に陥れたのである。

これより先、時の代議士田中正造は、この困窮農民の先頭に立ち、政府と古河鉱業に対し、補償と救済、更に対策を要求、十数年に亙って抗議をつづけ、明治３４年１０月遂に国会議員を辞職、同年１２月１０日、第１６通常国会開院式の帰途の明治天皇に、死を決してこの惨状を直訴した。その後も農民と共に身をなげうって、時には官憲の介入とも闘いながら抗議し、将にその生涯をかけて訴え続けた。やがて世論もこの状況を批判、そして東京の学生７００人が現地へ行動するなどあり、遂に、谷中村に土地収用法が発動され、強制買収、強制立退を執行したのである。県としても罹災民の救済に当惑しながらも、其の方策を北海道開拓移民へ斡旋したのである、勿論強制することも出来ぬが、罹災民もまた生きる道を考え、一苦渋の選択、ここに明治４４年４月、瀬下六右衛門を団長に６６戸２４０人が、「千古の原始林に、さては巨熊咆哮する蝦夷地」へと向った。先祖代々の墓もその侭にして、生まれ育った故郷を後にしたのであった。その人々の心境は、なに人も慮りしる事の出来るものではない。時の下野新聞はその社説で「略一今や桜花の節に際し、ふる郷の花にそむきて　一先祖伝来の地を去りゆき、異郷の住民となる者、胸中の感、夫れ如何、中略一北海の地寒しと雖も、ひたすら行きて健闘せよ、汗の値は即ち富なり。」と、熱誠こめて激励している。

一行は４月７日、小山駅を出発、青函、函館本線、そして旭川から十勝線で池田と乗継ぎ、建設中の網走線（池田-網走）（現ふるさと銀河線）の建設列車（貨車にムシロ）で、漸く五日目の夕方野付牛（現北見）に辿りついた、その夜は屯田兵の各家庭にお世話になり、翌朝屯田の若衆のお世話で馬橇にて出発したが、雪解け泥濘で馬脚もままならず、ルペシペ近くの相内でも民家に分宿して世話になり、翌日老幼者を馬橇に乗せ、雪深いルペシペ峠を股まで没しながら、難渋の果てに武士まで辿りついた。時に、明治４４年４月１４日午後９時であった。